

# 野鳥への給餌を考える

⑨

片野鴨池(石川県加賀市)で冬を越すガンやカモなどの水鳥の数は、現在5000羽を超える。わずかに10秒の水辺にこれだけ集まるとあって、鴨池観察館を訪れる人たちから「餌をあげているのですか」とよく聞かれる。だが、餌やりは一切していない。自然の状態で、鳥たちが過ごしやすい環境を守るように心がけている。

公園などで人が与える餌に群がる野鳥の姿をときどき目にするが、野鳥は本来、自然界の「食べる」「食べられる」というつながりの中で生きている。安易に餌を

与えることは、そのバランスを崩しかねない。

特に、水鳥が多く集まるような環境での無秩序な餌やりは、水質悪化や感染症のリスクも高いため、注意が必要だ。また、トビのように、餌を与えたことがきっかけで、人の食べ物を狙うようになり、あつれきを生みだした例もある。絶滅が心配されるタンチョウのような特別な例を除き、鳥たちが本来のつながりの中で生きられる環境を大切にしたい。

では、個人の庭に餌台を出して、野鳥との触れ合いを楽しむのはどう

だろうか。餌台を出すと、普段なかなか近くで見られない野鳥を間近で観察できる魅力がある。

英国を訪れたとき、人々があたりまえのように庭に餌台を置き、集まる鳥を観察している様子に驚いた。英国鳥類保護協会によると、毎年1〜2月に一庭に来る野鳥を見る日(ガーデンバードウォッチ)を定め、家や学校の庭で見つた鳥を記録し、野鳥保護の意識を高めるきっかけになっている。協会の会員数は100万人を超えており、英国で野鳥に親しむ人々が多いことがわかる。

餌台については、日本野鳥の会はこうした教育的効果も踏まえて、出すのは食べ物が少ない冬だけに限定するよう呼びかけ

ている。春から夏にかけては、餌となる虫が多く、子育ての時期でもある。ヒナが育つには栄養価の高い虫を捕らなければならないからだ。

野鳥と親しむ手段はさまざまだ。鳥たちを見つめる中で、その暮らしや自然の仕組みにも、思いをはせてほしい。

【岡本裕子・日本野鳥の会加賀市鴨池観察館チーフレンジャー】

◆ 次回は2月25日に掲載

「ねむろバードランドフェスティバル」が2月16、17の両日、北海道根室市で開かれる。講演会「オオワシの現状と課題」や探鳥会など。問い合わせは根室市観光協会(0153・24・3104)。



かつて、ウトナイ湖(北海道)で見られた、来訪者の餌やり。現在は餌を与えないように呼びかけている。日本野鳥の会提供